

アメリカ国民作家になった ロシア亡命移民女性

——アイン・ランドの『肩をすくめたアトラス』——

藤 森 かよこ*

はじめに

アメリカの有名出版社ランダムハウス／モダンライブラリー（Random House/Modern Library）が、1998年に「20世紀の小説ベスト100」の一般読者投票結果を発表した。第1位と2位と7位と8位を同じ作家の作品が占めた。この作家のエッセイは、同じく一般読者投票による「21世紀のノン・フィクション、ベスト100」の第1位も獲得している。この作家の名前は、アイン・ランド（Ayn Rand: 1905-82）という。この出版社の評議会（Board）が選んだ20世紀の最高の小説は、ジェームズ・ジョイス（James Joyce）の『ユリシーズ』（*Ulysses*）だったのだが、読者が選んだのは1957年に発表されたランドの『肩をすくめたアトラス』（*Atlas Shrugged*）だった。1991年に、国会図書館（the Library of Congress）とブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ（the Book-of-the-Month Club）は、共同で「あなたが人生で最も影響を受けた本」の読者調査をした。第1位が聖書だったのは、驚くべきことではないのだが、第2位が、この『肩をすくめたアトラス』だった（Gladstein, (a)26）。

この小説のアメリカ合衆国における影響力と一般的評価は、このように大

* 本学文学部

キーワード：アイン・ランド、冷戦、国民作家、客観主義、個人主義

きい。しかし、日本においてはアメリカ文学研究者ですら、この小説を読んだ人間はほとんどいない。どういうわけか、日本にはこの作家とこの作家の作品は、少なくとも文学の文脈では紹介されたことがない。あれほどに欧米の文献の翻訳には熱心である日本なのに、翻訳もされたことがない。ただし、これは一概に、日本のアメリカ文学研究者の怠慢とばかり言えない事情もある。確かに、ランドは、その各種著作が出版以来総計2000万部を超え、現在でも毎年数十万部は売れて版を重ねている超有名作家であり大衆思想家 (pop philosopher) であるのだが、アメリカ本国においても、彼女に関する本格的な学術的研究が目立って発表されるようになったのは、1990年代に入ってからである。埋もれた女性作家の発掘と再評価に努めて来たフェミニズム批評も、ランドに関しては、その作業がまとめられたのは、つい最近の1999年である。¹⁾アメリカのアカデミズムの風潮の後追いと紹介と模倣が、日本のアメリカ文学研究の伝統的あり方であるので、宗主国アメリカのアカデミズムに認知されない作家の研究が、属国日本において、なされないのは無理もないことなのだ。また、ランドは小説よりも、哲学や政治思想に関する著書がはるかに多い。したがって、日本で紹介されてきた数少ない機会も、政治思想の文脈からである。特に、現代アメリカ政治思想研究の第一人者である副島隆彦は、リバタリアニズム (libertarianism) という政治思想を日本に初めて紹介して注目を浴びたが、この思想の先駆的提唱者がランドなのである (副島, 294)。²⁾ 文学者としてのランド研究が遅れてきたのは、こうした彼女の仕事の幅広さからも来ているのだ。

本論の目的は、日本では知られざる超有名女性大衆作家のアイン・ランドの代表作『肩をすくめたアトラス』の日本初 (多分) の紹介と分析である。論の中心は、なぜこの小説が、1957年の出版以来アメリカの草の根の人々、読者に支持されて来たのかを考察することにある。と同時に、このような超有名女性大衆作家の研究がアメリカにおいても、日本においても、なぜ、こうも遅れてきたのかという問題も考察したい。この問題が、アイン・ランドという作家の特異な思想から生じていることは、言うまでもない。結論を先

取りすれば、この作家の提唱する思想は、われわれが生きる現行の社会の伝統的価値観と真っ向から対立するものであるし、20世紀以降のアカデミズムの提示して来た人間観、世界観とも対立するものなのである。

I アイン・ランドという作家

ランドは日本では未知の作家であるので、ここでは少し詳しく彼女の伝記的事実を記述することにする。ランドは第一次ロシア革命勃発の1905年に、当時のロシアの首都ペテルスブルグ（ソ連崩壊前のレニングラード）に大きな薬局を経営するユダヤ系ブルジョア階級の家庭の三人姉妹の長女として生まれた。父は、大学で化学を学び大きな薬局を経営していた。本名はアリッサ・ロウゼンバウム（Alissa Rosenbaum）である。17年の第二次ロシア革命、18年のロシア共産党発足、19年の十月革命後、父の薬局は国営化され、ランドの一家は困窮し辛酸をなめる。歴史を専攻し哲学を好んで学んだペテルスブルグ大学（ソ連崩壊前のレニングラード大）を25年卒業し、その後、映画学校に入りシナリオについて勉強する。しかし革命後のロシアの混乱、統制、貧困、自由剥奪、個人の尊厳の無視、抑圧に苦しんだランドは自由の国アメリカに夢を賭けることにする。

彼女は、シカゴに移民した親類を訪問するという理由で念願のパスポートを手に入れる。26年にニューヨークに上陸する。この時、本名を、アメリカ風にアイン・ランドと改名した。シカゴの親類宅にしばらく厄介になるが、そのままランドはアメリカに留まる。両親も承知のうえの、最初から亡命するつもりでの出国であった。わずかな所持金とタイプライター以外に、手荷物も少ない移民としての貧しい暮らしが始った。英語もろくに話せないまま、新聞売りや給仕や店員など職を転々とする。英語の勉強も兼ねての映画館通いが慰めであり、当初の希望通り、シナリオ作家になりたくてハリウッドへ移る。ランドは、21歳で英語を学び始めて、英語を使用してのプロのライターになろうとしたのだ。当時のハリウッド三大監督の一人セシル・B・デミル（Cecil B. DeMille）と知りあい、エキストラの職を得たり、衣装係となっ

たりして念願の映画界に入り込む。29年には無名の男優フランク・オコーナー (Frank O'Connor) と結婚する。延長に延長を重ねてきたビザの更新がこれ以上できず、不法滞在という状態を避けるための手段でもあった。ランドは、31年に晴れてアメリカ合衆国の市民権を獲得する。

ランドはロシアでの自らの苦難の青春時代を題材にしたシナリオを書いた。その中から、36年に『我ら、生きるもの』(*We the Living*) という小説となって出版されたものもある。それは革命期の混乱し腐敗したロシアから自由を求めて単身、国境を超えようと試みて銃殺されるヒロインを描いたものだったが、時代の空気にこのテーマは即さず、注目を浴びることはなかった。30年代は「赤い十年」(*The Red Decade*) である。29年の大恐慌がひきかねとなって資本主義経済への幻滅から労働運動が全米を圧巻し、社会主義が現状打破の思想として期待され、ソ連に熱い目が注がれた時代である。時のルーズベルト政権も、大不況失業対策のために資本主義の原則からはずれたニューディール政策を採用し、敵対勢力からその政策の違憲性を問われたぐらいに、時代は社会主義礼讃が風潮だった。スターリンによる反スターリン派大弾圧(逮捕者250万人、処刑68万人、獄死16万人の粛清であった)を見ることはなかったにせよ、ソ連の現実を知っていたランドにとっては、30年代の「赤い空気」は苛立たしいものだった。後の47年に、ランドは非米活動委員会(House Un-American Activities Committee)において、当時の映画界の、現実のソ連社会の過酷さを見ないで美化して描いた親ソ連ぶりについて、証言しているぐらいである(B. Branden, 200-3)。

1934年に彼女の初の劇作品『ペントハウスの伝説』(*Penthouse Legend*/原題は *Woman on Trial*/後に *Night of January 16th* と改題される)が、ハリウッドで上演された。35年にはブロードウェイで上演されることになり、これを契機にランド夫妻はニューヨークに移る。この劇は半年間上演され、ランドは少し注目を浴びたが、あいわず経済的には苦しい生活が続いた。その生活が、7年がかりで執筆し43年に出版された『水源』(*The Fountainhead*)によって激変した。この小説は、12の出版社から断られた末の出版であり、

まともな宣伝もされなかったし、戦時中の物資不足、用紙不足により、絶版の憂き目も見たが、口コミで読まれ売れ続けた。ついには映画化の申し出も受けて、ランドは莫大な映画化権料を手にした。映画化のシナリオ執筆も要請されたランドはニューヨークから離れ、再びハリウッドに移り、ロス・アンジェルス郊外に牧場と屋敷を手に入れる。生活が安定した彼女は、ロシアから家族を呼ぼうとしたが果たせなかった。両親は第二次大戦中のドイツ軍によるレニングラード包囲戦のために死亡した。結局、ランドは1982年に亡くなるまでの生涯、祖国にはついに帰れなかったし、帰らなかった。

その後は映画のシナリオ (*Love Letters, You Came Along* など) を精力的に書き、46年には『讃歌』(*Anthem*) を発表する。49年にゲーリー・クーパー (Gary Cooper) 主演の映画『水源』が上演され、原作は再び脚光を浴びる。しかし彼女の文名を決定的にしたのは、執筆に14年間を費やし、57年に出版された大長編作『肩をすくめたアトラス』(*Atlas Shrugged*) である。しかし、これ以後は小説は書かず、自らの思想を整理し深める論文が著述の中心となった。主なものに、61年の『新しい知識人のために——アイン・ランドの哲学』(*For the New Intellectual: the Philosophy of Ayn Rand*)、64年の『わがままの美德——利己主義の新しい概念』(*The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*)、67年の『資本主義——知られざる理想』(*Capitalism: The Unknown Ideal*)、71年の『新左翼——反産業革命』(*The New Left: The Anti-Industrial Revolution*) がある。これらの著作は若い読者に熱狂的に受け入れられ、「ランド教徒」(Rand Cult) と揶揄されるような信奉者たちが彼女を取り囲んだ。その中には、彼女の講演や講義を企画する研究機関を作った心理学者のナサニエル・ブランデン (Natahniel Branden) やフォード政権の経済諮問委員会議長を努め、最近まで、さしずめ日本ならば日銀総裁に匹敵する連邦準備理事会 (Federal Reserve Board /FRB) 理事長としてアメリカの経済政策の重鎮であり続けたアラン・グリーンスパン (Alan Greenspan) もいた。現在でもランド思想の民間研究機関はいくつかあるが、みなこのカルト出身の弟子とその後継者によって運営さ

れている。ランドの遺稿管理者であり著作権所有者のレオナルド・ペイコフ (Leonard Peikoff) 率いるカリフォルニアの「アイン・ランド研究所」 (The Ayn Rand Institute) に、ランド思想の源流とされるアリストテレス哲学の研究者アラン・ゴットヘルフ (Alan Gotthelf) が会長を務めるニュージャージー大学が本拠地である「アイン・ランド協会」 (The Ayn Rand Society) がある。この学会は、アメリカ哲学学会の分科会でもある。また、先のブランデンやデイビッド・ケリー (David Kelly) の「客観主義研究所」 (The Objectivist Center) がニューヨーク郊外のポーキプシーにあり、リバタリアニズム系政治思想誌『自由』 (*Liberty*) ともつながる「アイン・ランド研究誌財団」 (The Journal of Ayn Rand Studies Foundation) がワシントンDCにある。面白いことに、これらの組織は互いに没交渉であり、この反目状態がカルトの求心力と排除的傾向を示しているのかもしれない。

ともあれ、こう書くとロシア亡命移民からたたきあげたユダヤ系女性大衆思想家の硬派な顔が想像されるが、ランドの実人生は、当然のことながら彼女の小説世界よりはるかに混乱し人間臭い。ランドは、夫の美男ぶりから小説のインスピレーションを受けてはいたし、夫の温厚さ、忍耐強さに生涯支えられたが、夫はランドの思想や小説を理解する知性には欠けていた。積極的な生き方はできない比較的無気力な人物だった。生涯職業的には成功せず、生活の収入は主に妻のランドに依存していた。芸術的天分に恵まれ、晩年には画家となったが、ランドは、こうした夫に飽き足りなかった。それも原因して、ランドは自分の信奉者であり弟子であった25歳年下のブランデンと不倫関係を持った。それも、夫やブランデンの妻に堂々と宣言して、彼らに納得させてのことである。夫が愛するカリフォルニアの牧場や自宅も売って、ニューヨークに再び居を移したのも、理由はブランデンだったという。この不倫関係は約14年間継続された。このいきさつと破滅的結果と当事者たちの葛藤については、(当時の) ブランデンの妻バーバラ (Barbara Branden) がランドの死後4年後に出版した『アイン・ランドの情熱』 (*The Passion of Ayn Rand*) に詳しい。これは、ランドの人生と作品生産にまつわる事実と、

人間関係を詳細に記録し整理した、初の本格的ランド評伝である（これを元に、同名のテレビ映画が2000年に製作され、ビデオ化もされた）。それに対抗するかのように夫のナサニエルもランドとの関係を『裁きの日——アイン・ランドとの年月』（*Judgement Day: My Years with Ayn Rand*）と題して、89年に発表した。99年には改題してその改訂版も出版している。それぞれが「スキャンダル暴露物」に陥らず真摯なランド研究になっているのが、興味深い。

72年には末の妹のノラに再会できたが、妹夫婦はアメリカ合衆国になじめずソ連にもどって行った。75年にランドは肺ガンを宣告される。手術は成功したがその後の健康状態は思わしくなく、夫の死後3年を経過した82年にニューヨークにおいて77歳で亡くなった。圭角の激しさから多くの友人知人と絶交してきたランドに、最後まで忠実だった弟子のペイコフが、ランドの著作・遺稿版權所持者となり、現在にいたっている。ペイコフは、彼女が新聞に掲載したコラムや、手紙や日記を整理して出版している。彼女の生涯を題材に、ドキュメンタリー・フィルム『生の感覚』（*A Sense of Life*）が製作されたが、これは96年のアカデミー賞のドキュメンタリー・フィルム部門にノミネートされた。

II 『肩をすくめたアトラス』のプロットと、その多層性

この小説の表題のアトラスとは、言うまでもなく、ギリシア神話の天球を支える巨人アトラスである。簡単に述べれば、この世界の政治や経済や文化を支えている頭脳と才能と責任感を持った人間が、彼らや彼女らの能力に依存し、それを搾取する人々に自分たちを搾取させるがままにしないで、「ストライキ」を始めたら、この世界はどうなるか、つまりこの世界を支えるアトラスのような人々が「もうやめた」とばかりに「肩をすくめた」ら、この世界はどうなるか？というのが、この小説内容である。『肩をすくめたアトラス』は、ペーパーバック版でも1063ページある長編小説であり、プロットも複雑で登場人物も非常に多い。掛け値無しでヒーローと目される登場人物

でさえ4人もいる。この小説が、「ジョン・ゴルトって誰?」(“Who is John Galt?”) という文で始められているように、この小説を推進する主要プロットは、ヒロインのダグニー・タッガート (Dagny Taggart) が、このジョン・ゴルトが誰なのか、何を目論んでいるのか、を追求する謎解きである。時代は具体的に設定はされていない。便宜上、ヒロインを中心にプロットを以下のように要約してみる。

ダグニーは、無一文から祖父が設立し発展させたアメリカ屈指の大鉄道会社「タッガート大陸横断鉄道」(Taggart Transcontinental Railroad) (以後TTRと記す) の鉄道運行部門担当副社長である。34歳の若さながら、無能な社長の39歳の兄ジム (James Taggart) を歯牙にもかけず、大鉄道会社を運営する。少女時代から、彼女とこの鉄道会社は一体だった。代々発展してきたこの鉄道会社は、人間の可能性と有能さと責任の象徴だった。創業者の孫娘という立場を秘めて、毎夏をすごすハドソン河溪谷沿いの別荘近くにあるTTRの駅の夜勤電話番をアルバイトで勤めるほど、彼女は鉄道の全てを熟知し知悉したかった。大学でも工学を学んだ。

最近、彼女は、銀行家や音楽家や法律家から鉄道技師まで、どの分野においても、なぜか優秀な責任感豊かな人材に限って仕事を辞めて失踪してしまうことが多くなっていることに気がついている。そのために、以前では守られていた物資の納期とか工事の進展とか、鉄道の安全な管理などのシステムが正常に機能しなくなっている。それに加えて、人間の創意工夫と努力を促す自由競争による社会の発展を信じるダグニーが危惧しているのが、政府の政策だった。政府は、自由競争を排した資本主義経済体制から、発明家や産業家や労働者が努力と頭脳で獲得した利益を国家が管理して「必要に応じて」国民に分配し、国民みなで繁栄できる「協同的共生社会」を実現する経済体制へ移行しようとしていた。その大義の実現のために、政府が採る政策は、次のようなものである。適者生存の弱肉強食の企業間競争を排するために新奇な製品を発明して売り出したり、新事業を開拓することを制限する「反競

争法」(Anti-dog-eat-dog Rule)の施行。優れた製品やサービスを提供できる企業は独占的になり公共の福祉に反するので、すべての会社にとって規模に応じて必要な利益が得られるようにする「機会均等法」(Equalization of Opportunity Bill)実施。社会の安定した全体的協同的發展のために、労働者や従業員の流動化を避けるために、離職や転職や解雇を禁じる「10-289号指令」(Directive 10-289)の発令と徹底。ダグニーの兄は、自分の無能さを思い知らせる有能な産業家、企業家たちへのルサンチマンから、政府に加担して行く。彼は自分が楽に怠惰に生きて、社長の地位と金が保証されればいいと考えるだけの卑劣な人間だが、口では「最大多数の人々の幸福の実現が正義」だと唱える。

アメリカの産業はじょじょに衰退し、労働者は労働意欲をなくしていく。と同時に、前からの現象であった「人材の失踪」に拍車がかかり、TTRを含めたどの産業、商業分野も無責任と責任転嫁と無能と投げやりな人々のみが残される状態となっていく。社会の停滞と不安と増していく混乱の中で、人々の間には、答えようもない問題には“Who is John Galt?”と言う奇妙な習慣が、すでにいつからかできあがっていた。ダグニーは、そのジョン・ゴルトこそ、社会から有能な人材をどこかへ流出させる「破壊者」だと考えるようになる。ダグニーは、その破壊者から自分の鉄道会社を守らなければならない、最後までその破壊者と闘わなければならない、と固く決心する。

休暇の旅行中にダグニーは、廃業された大自動車工場の廃屋に打ち捨てられたモーターの残骸を見て驚愕する。工学を専攻した優秀なエンジニアでもあるダグニーには、それが現行の輸送機関の問題をすべて解決できるような前代未聞の画期的モーターの完成品が人為的に破壊されたものとわかる。その未来を開くモーターの設計者をつきとめるために、ダグニーは様々な調査をするが、その設計者はわからない。

実は、そのモーターの設計者こそ、ジョン・ゴルトだった。彼は勤めていた大自動車会社が売却され、新しい経営者が「能力に応じて労働し、必要に応じて収入を得る」システムを導入し理想的な共同社会としての新しい企

業を作りたいと発表した時に、会社を辞めた。自分が設計して完成させたモーターを破壊して失踪した。能力のある者は労働過剰になるばかりで、収入は労働量や功績ではなく、家族数などの必要に応じて分配され、それも労働者の投票で決定されるという全体主義的システムのために、この自動車会社は、倒産する。なぜならば、有能な者の辞職と故意の怠慢が多くなり、無能な者は収入が保証されているので一層に怠惰になり、また労働者間の嫉妬反目（同僚の結婚や出産は、自分の収入の減少につながるから）は増大し、息の詰まるような相互監視の環境は、生産性を激減させ、労働者の志気を壊滅させたからである。この現象を予測して早々と会社を捨てるだけの見識と勇気を持った男についての噂が、“Who is John Galt?”という流行りことばの起源になったのだった。つまり、「ジョン・ゴルトって誰？」→「知らない」→「答えのわからないことを言うなよ。わかるはずない」と変化したのである。

ジョン・ゴルトは、有能な人間の能力を搾取して、有能な人間の美德を利用して自分は楽をして生きようとする寄生虫的人々に汚染されていく社会に見切りをつけて、新しい社会を創設しようと、賛同者を募ってコロラド山中に別社会を建設する。失踪した人材たちは、この別天地「ゴルト峡谷」（Galt's Gulch）を拠点として、この新世界にふさわしい人物を探し救出するために、「旧世界」では人目につかない労働で社会に埋もれながら活動していたのだ。ゴルトは、10年以上もダグニーの鉄道会社の下級労働者をしながら、いずれダグニーをも「新世界」に誘うつもりで彼女の行動を監視していたのだ。真相を知って驚くダグニーだが、祖父から伝わる鉄道会社を見捨てるわけにはいかない。

社会はさらに停滞、混乱し、物資の輸送や交通がマヒする。農産物や工業製品も生産量が減少し、かつ生産地から消費地の都会まで物資は流通しなくなる。電力などエネルギー資源の管理、利用システムも壊滅しつつある。ゴルトは全米へのラジオ放送を通じて、新世界樹立の必要性、旧世界の搾取的構造破棄を唱えて彼と彼の仲間の大義を国民に伝える。政府はあわてるが、

混乱した社会に秩序をもたらす人材が政府機関にはいないので、ゴルトと妥協を図ろうとするが、彼は拒否する。政府機関は彼を捕まえて拷問にかける。ダグニーや「新世界」の仲間たちは、ゴルトを救出する。ダグニーも、ついに旧世界に絶望し彼らと行動をともにすることになる。システム機能不全のために混乱は一層拡大し、その收拾をつける責任ある機関も人材も旧世界にはいない。繁栄を極めたニューヨークにすら大停電が起き、アメリカ合衆国は破滅の道をたどる。しかし、ゴルトたちにとって、この終末こそが、アメリカの破滅こそが、「彼らのアメリカ」建国の真の始まりなのだ。

アイン・ランド文学研究において、先駆的研究者であるミミ・レイセル・グラッドストーン (Mimi Reisel Gladstein) は、この小説には、「ミステリー」「サイエンス・フィクション」(以下S Fと記す)「女性ファンタジー／フェミニズム寓話」「アーサー王風ロマンス」の四つのレベルがあると指摘した (Gladstein, (a)33-61)。小説内容のより確実な把握のために、グラッドストーンの指摘を利用して、もう少し詳しく小説内容を検討したい。

ミステリーであることは、上記の小説内容の紹介でも明らかだが、S Fでもある理由のひとつは、この小説内にゴルトが開発した「静的エネルギーを動力に転換し、鉄道の一車両の半分の大きさに一国の電力をすべて供給できる夢のモーター」が登場したり、ダグニーの恋人になる大鉄鋼会社を営するハンク・リールデン (Hank Rearden) が、鋼鉄よりも軽くて強い奇跡の合金リールデン・メタルを発明したり、ダグニーやリールデンの良きビジネス・パートナーであるエリス・ワイアット (Ellis Wyatt) が枯渇した油田再生技術を開発したりするような、現在でも不可能な技術が登場するからである。ただし、ランドは理工学系の専門知識はなかったので、「空想科学小説」らしいリアルで説得力のある、かつ21世紀の読者が読んで、作家に「先見の明があった」と感銘するような事物も技術も想像できなかった。また、20世紀後半は飛行機などの空輸の時代であって鉄道はさびれていくということも見通せなかったし、多忙なビジネス・ウーマンのヒロインに携帯電

話を持たせることもなかった (Gladstein, 42-43)。その意味で『肩をすくめたアトラス』に描かれる世界は、20世紀的前半的な鉄道や鋼鉄や石油に依存した、セピア色した「懐かしい未来」である。

それでもなおかつ、この小説が優れたS Fであるのは、「国家と世界が、ある特定の実践と方向を採り続けるのならば、どうなるかをランドが仮定して書いた未来」(Gladstein, (a)40) が描かれているからだ。S Fとは、未来を想像して小説にするわけであるが、作品に輝かしい未来＝ユートピアが描かれようが、暗黒の未来＝ディストピアが描かれようが、S Fは、多かれ少なかれ現在への批判、風刺を前提としている。現在の文脈では書けないことを、未来という架空の文脈で書くのがS Fでもある。描かれる未来は作家が危惧する現在の反映か、もしくは反転である。

『肩をすくめたアトラス』に描かれるのは、アルゼンチンもチリも英国もフランスもドイツもグアテマラもインドもメキシコもノルウェイもポルトガルもトルコも「人民国家」(People's State of ...) と冠された共同的国家、社会主義国家となった世界であり、その世界の潮流の中でアメリカ合衆国も経済システムを資本主義から社会主義へと変えていく世界である。全体の利益、世界の利益のためという大義名分で、アメリカの生産する富が各国の人民国家に援助として流出する世界でもある。この小説の構想・執筆期間(40年代半ばから57年)は、アメリカとソ連の冷戦が始り強化された時期である。社会主義国家ソ連の国際社会での台頭と東欧やアジア、中近東、南アメリカへの勢力拡大に対する、革命後のロシアの混乱と困窮を経験したランドの恐怖が、この小説には横溢している。ただ、社会主義とか共産主義とか全体主義とかいう用語は、このランドの小説には、いっさい使われていない。ロシアとかソ連とかソ連陣営の国の名前もいっさい言及されない。しかし、この小説が、アメリカ的個人主義／資本主義／自由競争とソ連的集団主義／社会主義／計画管理経済の対立を描き、この小説世界の善と正義は、前者にあることは明々白々に露骨である。この意味において、『肩をすくめたアトラス』は、善としてのアメリカ的なものの勝利を歌い上げる勧善懲悪「冷戦ミス

テリーメロドラマSF」である。ジュディス・ウィルトは、「アメリカでの
アイン・ランドの小説の根強い売れ方 (the stubborn bestsellerdom) とい
うのは、移民の作家が国家的幻想生活の鍵となるような構成要素をつかんで
いたということを示唆している」と述べた (Wilt, 173)。ならば、『肩をす
くめたアトラス』を書いたということにおいて、ランドはアメリカの国民作
家である。ある国家の国民作家の機能とは、その国民国家の正当性を保証し、
その国家の維持と強化に貢献する作品を生産することだろう。国家を支える
共同幻想を物語の形式で国民 (特に10代から20代の若い人々) に植え付ける
のが国民文学である。

と同時に、この小説は、第二波フェミニズムが台頭する前に、当時として
は破天荒な英雄的ヒロインであるダグニーを造型した点において、フェミニ
ズム小説の先駆でもある (Gladstein, (a)46-56)。ただし、ランド自身は同
時代のフェミニズム運動に関心はなかったし、自分をフェミニストとして認
識した形跡はいっさいない。ヒロインのダグニー造型について、ランドは可
能ならばこうありたいと願う理想の女性像を、「自分自身からいっさいの欠
点をとった、理想の自分自身」(B. Branden, 225) をヒロインにしたと、
「これは私のファンタジーだから」(N. Branden, (a), 95) と述べたと言わ
れている。ダグニーは、頭脳明晰なエンジニアでかつ大鉄道会社を実質的に
経営し、疲れを知らない不屈の闘士であり、飛行機の操縦もできるが、容姿
はあくまでも繊細優美な女性らしさを持ち、小説のヒーロー4人のうち3人
から愛される。その3人の男たちとは、ゴルトとリールデンと、ダグニー
の幼友たちであり初恋の相手でもあった南アメリカの銅山を一手に所有する
大財閥の若き当主フランシスコ・ド・アンコンニア (Francisco d' Anconia)
である。フランシスコは、ゴルトの大学時代の親友で、ゴルトの新世界
樹立の計画に賛同して、搾取的な政府に没収、利用される前に、故意に先祖
代々の財産を消費し鉱山を廃鉱にする。ダグニーを愛しているが、その秘密
のために彼女から遠ざかる。ダグニーを取り巻くこれらの英雄たちは、それ
ぞれがそれぞれを尊敬する親友、同志でもある。ダグニーは、妻のあるリー

ルデンと不倫関係になるが、その状態にいっさい屈託も罪悪感もない。リールデンに依存するわけでもなく、社会的に窮地に陥ったリールデンを救うために、ラジオ番組で正々堂々とリールデンとの関係を説明してスキャンダルなど蹴飛ばしてしまう。また、ダグニーは祖父の代から彼女の家に出てきた家出身の忠実な部下であるエディ・ウィラー (Eddie Willer) からも愛されている。まさに、ダグニーの造型には、女性の欲望や夢が臆面もなく全開されている。ダグニーは、ほれぼれするのを通り越して、あきれてしまうような、向かうところ敵なしのスーパー・ウーマンなのである。

作家ランドの意図が何であったにせよ、このダグニー像が一種キャンプ (Hardie, 363-87) な「女装した男」でしかなくても、せいぜい「前時代的ブルジョワ・リベラル・フェミニスト」にしか見えなくても、この小説が、フェミニズム意識のある読者に、人間としても女としても（もちろん人間と女を分離させるのは問題ではあるが）十全に生きる有能な積極的女性像を、有効で力強いモデルを与えてきたという点は否めない。大衆文学という大衆の欲望と夢の生成と維持に関与するメディアに、現実逃避装置として以外に、なにほどこかに社会に貢献する機能があるとすれば、そのひとつは、読者が生きることにより力となるような魅力あるモデルを提供することだろう。もちろん、こうした大衆文学の機能は諸刃の剣である。英雄的ヒロインが提示されても、女一般の矮小な現実が是正されるわけでもなく、現実逃避の夢がまたひとつ増えるだけのことかもしれない。しかし、ジョアン・ケネディ・テイラー (Joan Kennedy Taylor) が示唆するように、フェミニズムの浸透には、ダグニーのような、女の力への確信を内面化させる強力なイメージがアイコンが、まだまだ必要なのだ (Taylor, 247)。

そして、この小説のプロットの重要な点は、この小説が文学資源から古典的枠組みを借用しているということである (Gladstein, (a)56-61)。ある傑出した英雄の傘下に志を同じくする英雄たちが集まり世の中を動かして行くという構図は、『三国志』や『南総里見八犬伝』などで日本人にもなじみ深い。西洋人にとってのそれは英国を平定したとされるアーサー王と彼を取

り巻く円卓の騎士の伝説である。グラッドストーンは、ゴールトをアーサー王 (King Arthur) として、リールデンをランスロット (Lancelot), ダグニーをアーサー王の妃でありランスロットの愛人でもあるグイネビア (Guinevere) にたとえている (Gladstein, (a)58-59)。この小説には、どこか懐かしい未来を描くセピア色の風合いがあることは前にも言及したが、こうした点も要因のひとつであろう。

このように、『肩をすくめたアトラス』のプロットを検討していくと、この小説が「ゴミ古典」(trash classic) とか「思想小説のハーレクイン版」とか揶揄されながらも、45年近くもベスト・ロングセラーを続けてきた理由も納得できる。よくできたミステリーであり、かつ冷戦期のアメリカ人を支える国家幻想に強く関与した「冷戦メロドラマSF」であり、女性読者にとっては出会うのが困難な英雄的ヒロインが大活躍する読むのも快感の「女性用ファンタジー」であり、かつ伝統的文学の枠組みを活かした叙事詩的英雄物語でもある。このように実によくできた小説らしい小説を一般読者がほかっておくはずはない。しかし、なぜ、そのような小説を書いたアイン・ランドの学術的評価や考察が遅れて来たのか。特になぜ日本において遅れて来たのか。本論の冒頭で言及された理由以外に考えられるのか。

III ランド思想の因襲破壊性とアカデミズムとの齟齬

ランドが予期していたことではあったが、『肩をすくめたアトラス』の出版時の書評はさんざんなものだった。前述のバーバラ・ブランデンの評伝によると、ニューヨーク・タイムズ紙上においてグランヴィル・ヒックス (Granville Hicks) は「この小説は憎しみから書かれたことは明らかなようである」と評した。パトリシア・ドネガン (Patricia Donegan) は「強者の利益のために弱者が破滅させられることが賞賛されている……憎悪の産物である」と評した。ロスアンジェルス・タイムズ紙上においてロバート・R・キルシュ (Robert R. Kirsch) は「精神病院以外にこんなグロテスクな風変わりなものを見ることは困難であろう」と評した。ゴア・ヴィダール

(Gore Vidal) は、「アイン・ランドの哲学はその非道徳性においてほぼ完璧である」と評した。極め付けは、『ナショナル・レビュー』(*National Review*) 誌のウィットティカー・チェムバーズ・(Whittaker Chambers) の『肩をすくめたアトラス』のほとんどのページからも、痛ましい必然からの声が聞こえる。「ガス室へ行け！」という命令の声が」という評であった (B. Branden, 296)。すなわち、ランドの小説は、小説のできそのものよりも、小説を支える思想内容が弱肉強食の適者生存競争を推進する、人間愛の欠如した、道徳的に欠陥のあるもの、極めてナチス的な優生学思想的なものと解釈されて、その観点から酷評されたのだ。

なぜ、このように解釈されたのだろうか。また『肩をすくめたアトラス』は、ほんとうにこういう解釈が妥当なものだったのだろうか。ランドは、この小説の付記にこう記している。「私の哲学は、本質的に、人間を英雄的存在として考える概念である。自らの生命の道徳的目的を自分自身の幸福とし、自らの最も高貴な行為を生産的達成とし、自らの唯一の絶対物を理性とする存在が私の人間という概念である」(Rand, 1075) と。このランドの思想は、後に彼女が「客観主義」(Objectivism) と命名したものである。この思想は、形而上学的には客観的現実 (Objective Reality), 認識論的には理性 (Reason), 倫理的には自己利益 (Self-interest), 政治的には自由放任資本主義 (Laissez-faire Capitalism) の立場を採るというものである。下記の文は、ランドの弟子のブランデン夫妻が中心になって62年から65年まで定期的に出版していた『客観主義会報』(*The Objectivism Newsletters*) の1962年、8月号通算35号にランドが書いた「客観主義とは何か」("Introducing Objectivism") と題した文からの抜粋である。

1. リアリティとは、客観的絶対物として存在している。事実は事実だ。人間がどう感じようと、願おうと、希望しようと、恐れようと。
2. 理性 (人間の感覚によって供給された素材を認識し (identify) 統合する機能) は、人間が現実を認知する唯一の手段であり、知識の唯一の

源泉であり行動への唯一の指針であり、サバイバルの基本的手段である。

3. 人間は、どんな人間でも、自分自身そのものが目的である。人間は、決して他人の目的の手段ではない。人間は、自らのために存在しなければならない。自分を他人のために犠牲にしたり、他人を自分のために犠牲にしてはならない。自分自身の理性的自己利益と自分自身の幸福の追求こそが、人間の人生の最高の道徳的目標である。

4. 理想的な政治経済システムは自由放任（無干渉）資本主義である。それは、人間が犠牲者と搾取者でなく、主人と奴隷ではなく、相互利益のための自由で自発的な交換によって、交易者（trader）として、取り引きするシステムである。それは、物理的力に訴えることによって他人から価値あるものを奪うことなど誰もできないシステムである。誰も他人に物理的力の利用を行使しないシステムである。政府は、人間の権利を守る警官としてのみ行動する。犯罪者や外国からの侵略者のように、物理的力を行使する人々に対しての反撃としてのみ報復としてのみ、政府はその物理的力を行使する。十全な資本主義体制のもとでは、国家と経済の完全な分離が（まだ歴史的には実現されていないが）なされるべきである。同様に、また同じ理由で、国家と教会の分離もなされるべきである。

(Binswanger ed., 344)

上記の1の立場から、ランドはあらゆる神秘主義や主観主義や唯我論を否定する。主観という意識があるのならば、意識する物質がある。その意識体は否定できない実在なのである。2の立場から、ランドは、理性の行使を充分にしないで宗教や感覚やドグマに固着するのは、知的怠惰と思考からの逃避であるとする。人間の理性の行使とは、人間の自由意志による選択である。人間は常に理性に基づいて選択し自らの行動を自分自身で決定している。その理性の作業からの逃避は、人間にとって不道徳であり、自らの価値と能力に対する冒瀆的な行為だとする。3の立場から、ランドは個人主義（individual-

ism) と自己中心主義 (egotism) を肯定し、集団主義 (collectivism) や利他主義 (altruism) を否定する。利他主義を親切さや善意や他人の諸権利への尊敬と混同させてはいけない。「利他主義の基本原則とは、人間は自分自身のために生きる権利がないということであり、他人への奉仕のみが人間存在の唯一の正当化であり、自己犠牲が人間の最高の道徳的義務であり美德であり価値であるとする事」(Binswanger ed., 4) である。つまり、利他主義は、大前提として個人としての人間の否定がある。個人としての人間の理性に基づいた自由意志による選択より、集団の意向を優先させる。だからこそ、『肩をすくめたアトラス』に描かれる新世界、ゴールト峡谷のメンバーは、以下のことばを誓うのである。「私は、私の命を賭けて、私の命への愛を賭けて誓う。私は他人のために生きることは決してしない。また他人に私のために生きるよう依頼することは決してしない」(Rand, 675) と。

したがって、当然のことながら、利他主義が基本となるシステムである全体主義、共産主義、社会主義を、ランドは否定する。それが、4の立場である。なぜ、政府の介入や計画経済を許す修正資本主義ではなくて、古典的自由放任資本主義をランドが支持するのかについて理解するのに、フランシスコが小説内で展開する「マネー論」が助けとなる。彼は、「金(かね)が諸悪の根源」という通俗的見解に対してこう反論する。長いが引用してみる。

「あなたは、金の起源が何かとおたずねになりましたね。金とは交換の手段です。もし生産される物がなければ、人間が物を生産できなければ、存在しないのが交換です。他の人間と取り引きしたい人間が、交易によって取り引きするという行為、つまり価値ある物を得るために別の価値ある物を与えるという行為の原則の物質的形が金です。金は、たかり屋の道具ではありません。たかり屋は哀れっぽく泣いてあなたの生産物を所有することを主張します。金は、また略奪者の毒でもありません。略奪者、不正利得者は、あなたからあなたの生産物を力づくで取ります。金とは、生産する人間によってのみ可能にされるものです。これを、あなたは悪とおっ

しゃる？あなたが、あなたの努力への支払いとして金を受け取る時、他人の努力の生産物とその金を交換するという信念でのみ、そうするはずです。金に価値を置く人間ならば、たかり屋や略奪者ではありません。どれほどの大量の涙も、世界中からかき集めた銃すらも、あなたの財布にしまわれている紙を、あなたが明日生きるのに必要とするパンへと変換できません。その紙は、本来は金、ゴールドであるべきだったのですが、それは名誉の印です。あなたのその紙の所有権は、生産する人間のエネルギーに基づいたものだからです。あなたの財布は、あなたの回りの世界のどこかで金の起源である道徳的原則を踏みにじらない人々がいるという希望の表現です。これを、あなたは悪とおっしゃる？（中略）金は、あなたの生産物やあなたの努力ゆえに金を得ることを、あなたに許します。あなたの生産物やあなたの努力がそれを買う人間にとって価値があるという条件でならば。それ以外は駄目です。交換しあう者同士の強制されない自主的な判断による相互利益を持つ人々以外には、金は取引引きを認めません。人間は、自分自身の利益のために働かねばならないという認識を金はあなたに要求します。自分自身を傷つけるためではないのですよ。人間は自分が獲得するために働くのです。自分が損をするためではないのですよ。自分は重荷を背負う獣ではないし、惨めさを背負うために生まれたのではないという認識、人間には価値ある物を与えなければならないという認識、人間の共通の絆は苦しみの交換ではなくて、物の交換だという認識を金は要求します。他人の愚かさへあなたの弱さを売るのではなくて、他人の理性にあなたの才能を売ることを、金は要求します。あなたが他人が提供するまやかashiものではなくて、あなたの金が見つけられる最上の物を買うことを、金は要求します。人々が交易で生きるとき——最終的な働きかけとしては、理性によって、決して強制ではなく——勝利をおさめるのは最高の生産物です。最高の行為です。最高の判断と最高の能力をもった人間です。ひとりの人間の生産性の程度とはその人間が獲得する報酬の程度です。これが、人間の存在の掟であって、その道具と象徴が金なのです。これがあなたが悪と

お考えになるものでしょうか？」(Rand, 382-83)

都市や国が交換、交易のための市（いち）を中心に発展したものであることは歴史的事実であり、金（かね）は、本来の起源の物々交換から、商品と商品の交換の媒介物として発明された。それは画期的な発明であった。人間が自らの努力と知恵の結晶であるものを、他人の努力と知恵の結晶と相互に納得して交換する行為を、より便利なものにするために発明された金は、したがって当然、人間の知恵と努力の象徴でもある。このフランシスコの「マネー論」によれば、金が汚いのではない。金が諸悪の根源なのではない。その「人間の知恵と努力の象徴」である金を、「自分の努力と知恵」との均衡した交換ではなく、たかりや略奪で獲得しようとする意志や行為が汚いのであり、そのたかりや略奪という行為が悪なのである。他人の努力や知恵を、自分のそれと均衡した交換で得るのではない行為が悪なのである。利他主義は、こうした搾取の別名なのである。利他主義は、一見きわめて美しい行為に見えるが、自らの努力と知恵の産物を、他者の努力と知恵の産物と交換させるという公平な交易ではない、という意味において、他人からの自分への搾取を許すという意味において、自己を冒瀆することなのだ。それは、自己の努力と知恵を冒瀆することであり、自己否定であり、自己の生命の否定なのだ。またそれは、他者の否定にも通じる。他者の努力や知恵の産物を正当で均衡した報酬を提供することなく利用することを、自らにも許してしまう行為でもある。この意味で、社会福祉や慈善は、ランドの小説においては、搾取と略奪の偽装であり、結局は寄生的人間を許す悪なのである。この関点から社会主義国家の「能力に応じて、必要に応じて」（カール・マルクスの『共産党宣言』の有名な文句）というシステムは、悪であり、人間の尊厳への冒瀆なのである。だから、ランドは自由放任資本主義を支持するのである。

つまり、『肩をすくめたアトラス』には、単なるアメリカ的システムを善とする「冷戦メロドラマSF」だけにとどまらない相がある。確かに、この小説は、冷戦時代のアメリカにおいて、南北戦争の北部におけるハリエット

・ビーチャー・ストウ (Harriett Beecher Stowe) の『トムおじさんの小屋』 (*Uncle Tom's Cabin*) と似た働きをした (Gladstein, (a)21/27))。世界を善と悪の闘争、神と悪魔の闘争と見るマニ教的世界観が、近代小説の写実主義にはいりこみ、伝統的にアメリカの小説には寓話的相があり、「近代小説」離れしていることは、リチャード・チェイス (Richard Chase) が50年代に指摘して久しい (Chase, vii-xii, 12-13)。ロシア亡命者であるランドはヨーロッパの近代小説の素養も豊かであったが、自作にはアメリカの伝統的小説の型であるロマンス構造を踏襲した。ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の小説が、ピューリタニズムを土台とした神と悪魔の闘争を人間の内的葛藤の中に劇化したものならば、ランドの小説は、アメリカ的個人主義／資本主義／自由競争とソ連的集団主義／社会主義／計画管理経済の対立を、魂という私的領域から政治／経済という公的領域にまで広く展開した「冷戦ロマンス」であるが、実はそれ以上だったから、問題なのだ。正確に言えば、『肩をすくめたアトラス』において提唱されているのは、人間の生存様式の大きな二つの方向性、個人主義 (individualism) と集団主義 (collectivism) の対立、自己中心主義 (egotism) と利他主義 (altruism) の対立ではなくて、個人主義の集団主義に対する道徳的優位、自己中心主義の利他主義に対する道徳的優位なのである。

ここまで来れば、いかにこの小説が、伝統的道德や宗教が説くものと異なるかがわかる。特に伝統的キリスト教の価値観からすれば、ランドの提唱する人間は悪魔的に見えるのではないか。最大多数の人間の幸福を実現するのが政治の目的とされて、集団の福祉が個人の選択より優先され、利他的行動が称揚されるのが、現行の政治文化の一般的前提、常識である。だから、本人の意志や努力に関わらず、所与の条件のために、理性を発揮する能力に恵まれず、かつ他者との交換に見合う努力や知恵の産物を生産できない人間はどうなるのか？と我々は当然、疑問に思う。その解答は、この小説にはない。だから、ランドは弱肉強食論者と呼ばれたのだが、ゴールト峡谷に新世界を築く人々とは正反対の、小説内におびただしく描かれる「たかり屋」や「略

奪者」の群像を検討すると、そうした批判はあたらないことがわかる。

たとえば、ダグニーの兄ジェイムズは、無能で責任を果たせないことを自覚しているが社長の地位は手放したくない。難題は常に妹に押しつけて来た。能力がなく生まれたのは、自分の責任ではないのだから、このままの自分を世間は認めて受け入れてしかるべきだと考える。そういう自分のような人々が安心して暮らせるためには、社会に自由競争や能力競争があってははいけないと考える。有能に生まれた人間は、その有能さはその人間の生まれつきで努力で得たものではないのだから、他人のために使う義務があると考え。だから妹のダグニーに依存していても、全く感謝の気持ちはない。自分のために、妹がもっと働くことを要求しさえする。それは妹の義務だと彼は考える。

ダグニーの恋人になる大鉄鋼会社を経営するハंक・リールデン (Hank Rearden) は、鋼鉄よりも軽くて強い奇跡の合金、リールデン・メタルを自ら研究し長年の試行錯誤の末に発明した。彼は、ランドが賛美してやまない努力と知恵の産物を社会に提供できる産業家であり企業家である。しかし彼の妻や母親や無職の弟は、彼を金もうけにばかり熱中して家族をかえりみないと責める。その家族の生活を支える金を稼ぐのはリールデンなのだが、「金が全てではない」という理由から、彼らはリールデンの自分たちへの貢献を認知していない。彼らはリールデンに寄生していること、リールデンの自分たちへの責任感や献身、奉仕に依存して生存できていることを認識できない。リールデンは能力があるのだから自分たちを養い支えるのは当然なのだ。リールデンの家族は、自らの努力と知恵で何かを生み出すことがないので、彼を理解することが全くできない。家族の自分に対する冷酷な搾取を直視できるようになったリールデンが家族を捨てるとき、初めて、彼の家族は自分たちの卑劣さ、依存性に気がついて謝罪する。しかし、リールデンは家族だからという理由で、彼への搾取を正当化して彼を利用しつつ非難してきた家族を許さない。

読者は、このような、「たかり屋」たちが弱者と感じるだろうか？能力が

あるから強者とは限らない。無能だから弱者とは限らない。人間社会は、そのような単純なものではない。注目すべきなのは、ランドの「たかり屋」「略奪者」告発は、俗情と結託する政治家や努力なく生き残ろうとする無能な産業人、企業人ばかりではなく、一方的な依存関係の不公正さや搾取性、暴力性を愛という名で偽装し隠蔽しがちな、「親子」「兄弟」「夫婦」という個人的領域にも向けられているということである。政治的なものは個人的なものとは、フェミニズムが提起した洞察だが、ランドの小説が提唱する個人主義／自己中心主義は、この意味で公的領域から私的領域まで、貫通されている。この徹底性が、ランドの思想の因襲破壊性（iconocasm）をより際立たせている。ここまでの個人主義は、個人主義の本家本元の欧米でも想定されていないのだ。

ランドが批判したのは、アメリカのなかのソ連的なもの、ソ連的なものの基盤となる人間存在のありようなのである。個人が個人として生きることを受容しないこと、なのである。それがすべての基本であり根源なのに。個人の尊厳や自由を旗印にするアメリカという国家も、実体は国家統制主義（statism）であるし、集団主義であるし、国民が大勢に順応する盲目的奴隷なのだ。アメリカにおいて、独立した個人が自由意志から理性に基づいて行為を選択し、自らの能力の達成を、他者のそれと対等に交換するシステムが十全に機能しているのだろうか？冷戦は、本当に相反するものの戦いだろうか。人は自らの敵に似ている。似ていなければ敵対しない。ソ連的なものは、アメリカ的なものの相似かもしれない。ロシア亡命移民が亡命先の国家を盲目的に美化して書いたのが『肩をすくめたアトラス』ではない。アイン・ランドというロシア亡命移民は、冷戦という文脈を越えた、より普遍的な問題を提起したのである。だから、「冷戦ロマンス」なのに、冷戦終結後10年以上経ても、彼女の作品は古くない。より重要性を増している。個人主義と集団主義、自己中心主義と利他主義、この二方向に沿った人間と政治のあり方にまつわる問題（個人の尊厳か、集団の利益か／それはどんな利益なのか／政府とはそもそも何なのか／もし政府が必要ならば大きな政府か、

小さな政府か／個人の尊厳が侵されない集団と個人の共存形式は何か)は、21世紀に、より深く、切実に問われなければならない問題だからである。

批評家たちが、この小説を「憎しみから書かれた」だの「非道德的」だのと非難したのは、彼らが、通俗的、慣習的、伝統的価値観の中から、また現行の政治文化の枠組みから、この小説を判断したからであった。彼らは、商業主義のジャーナリズムから書く人々だから、こうした大衆社会に支配的な価値観遵守の立場で評するしかなかった。

しかし、なぜ、アカデミズムまでランドを無視したのか。ランド思想の因襲破壊性そのものは、アカデミズムがランドの小説を評価しなかった理由にはならない。アカデミズムは、一般的通念や類型化した慣習的思考に挑戦し、認識の枠組みを広げるのが機能でもあるのだから。アカデミズムのランド無視の理由としては、ランドの提唱する人間観と20世紀のアカデミズムが獲得した人間観との齟齬があげられる。「事実はない、あるのは解釈だけ」と言った近代相対主義の父と言われるニーチェや、フロイトの精神分析やアインシュタインの相対性理論やマルクス経済学の影響は言うにおよばず、特に60年代以降、フランスからアメリカに輸入された記号論や構造主義や脱構築理論などのポスト・モダニズム思想は、人間存在の自立性を解体した。人間の欲望は他者の欲望であり、人間の自我は社会的に歴史的に構築されたものであり、主体も自由意志も幻想なのである。「価値観の基盤を神や自然に据えようとしても、その価値観を生み出した側の人為的な所作でしかないことが暴露され」たのだ (Fukuyama, 73/邦訳 106)。アカデミズムからすれば、ランドの思想は素朴すぎる実在論であり、時代錯誤の英雄主義であり、危険な超人思想であり、その意味で知的な考察に値しない粗雑で幼稚な大衆思想なのである。

また、アカデミズムの中でも埋もれた女性作家の再評価作業を精力的にしてきたフェミニズム批評からも、ランドが無視されて来たのは、前述のグラッドストーンや、テイラーやナサニエル・ブランデンや、ウエンディ・マッケルロイ (Wendy McElroy) が述べているように、アメリカのアカデミッ

ク・フェミニズムの政治的立場が民主党系ラディカル左派に属し、マイノリティ擁護、弱者救済の高福祉社会をめざす「大きな政府」支持者であることから来ている (Gladstein, (b)51/Taylor, 241-45/N. Branden, (b) 226-27/McElroy, 155-56).³⁾ こうした政治的立場がランド説くところの集団主義や利他主義批判とあいられるはずがないし、ランドの造型した英雄的ヒロインも、時代遅れの「西洋／白人中心主義ブルジョワ・フェミニズム」の産物であり、階級や人種やエスニシティを視野に入れて久しいアカデミック・フェミニズムの枠組みには、ランドが入る余地がなかったのだ。

そして、このような作家が日本で未紹介であったのも、もう理由を述べるまでもないだろう。太平洋戦争敗戦後の日本の文学分野を席卷してきたのは、岩波書店に代表される「文化左翼」もしくは「心情文化左翼」だった。読書を習慣とするような高学歴の日本人は、その戦後の精神風土に育まれて、多かれ少なかれ、社会主義国家への肯定的な幻想と反米／嫌米／反資本主義的心情をつちかって来た。自分たちは、そのアメリカ帝国の傘の下での平和と繁栄を享受しているにも関わらず。その心情左翼風土は、1980年代にはまだ濃厚であった。冷戦終結後、ソ連や中国などの共産圏に対する美化、ロマン化傾向は、おさまりつつあるが、左翼的心情は依然としてアカデミズムの中に色濃く残っている。こうした従来の知的風土のなかでは、「冷戦ロマンス」としてのランドの小説は、アメリカの極右的言説として、読まれる価値のないものとして処理されたのだろう。冷戦ロマンスの作家らしく、冷戦期の国民作家らしく、名門士官学校ウェストポイントの卒業式祝辞を依頼されたこともあるランドには、保守、右翼、タカ派という公的イメージがつきまとってきた。憲法第九条のもと軍事的なことは政治的審議事項として提起されることにすら忌避／拒絶反応を起こす日本人には、ランドはあまりにも政治的、あまりにも挑発的な作家であろう。

また、ランドの思想が、戦後日本の知的風土ともあいられなかったと同時に、日本人の伝統的精神風土ともあいられないのは言うまでもない。日本の政治／経済体制が、資本主義の顔をした社会主義／共産主義だとは、多くの

研究者によって、よく指摘されてきたことだ。⁴⁾ 前述の日本にモダニズムが根づいていないこと、国民に真の近代的精神が内面化されてきていないことも、よく指摘されてきたことだ。さきに、例にあげた家族を捨てて新世界に参加するリールデンを理解できない文化の最右翼は、先進国の中でも日本文化であることは否定できないだろう。新世界の参加者の誓いが最も理解できない民族が、多分日本人であることも確かだろう。

しかし、筆者は、だからこそ日本人はアイン・ランドという作家、哲学者、政治思想家を知るべきだと考える。日本は好むと好まざるとに関わらず、アメリカ合衆国という国家、20世紀から21世紀にわたる帝国と交通していかなければならない。アメリカの草の根の国民の欲望と幻想の形成と維持に大きく関与してきた小説を書き、60年代に「客観主義運動」(Objectivism Movement) という一大ブーム(公民権運動ばかりがアメリカの60年代ではない)の中心となったアメリカ国民作家、大衆思想家アイン・ランドを知らないできたこと、読まなかったことは、日本人のアメリカ理解に大きな空白を残して来たのではないか。外国における日本研究、日本文学研究が、『源氏物語』や川端康成や三島由紀夫を論じて、司馬遼太郎を読まないのならば、その研究姿勢は、日本人からすれば歪なものに感じられるだろう。それと同じことを、日本のアメリカ文学研究はしてきたのだ。ホラー小説の大家、ディーン・クーンツ(Dean Koontz)は、かつてランドについて「彼女は単なる大衆作家ではない。あと20年は真価を認められないかもしれないが、アメリカ文学史上の重要な作家のひとりである」と評したことがある(Koontz, 296-97)。クーンツがこう言ったのは、1981年である。その時期は来た。日本でも、『肩をすくめたアトラス』ともうひとつのランドの代表作『水源』の翻訳作業が進行中と聞く。日本の一般読者がアイン・ランドを発見する日も近い。

本論は、ランドの代表作『肩をすくめたアトラス』分析の試みだが、小説の基盤となるランド思想の綿密な検討については、言うまでもなく不十分に

終っている。それは、今後の課題であるし、別の機会に論じたい。クリス・マシュー・スカバラ (Chris Matthew Sciabarra) が述べるように、ランドの思想は、「閉ざされたもの」「完結したもの」ではなくて、その彼女の思想からより発展した思想が生まれるような、示唆豊かな、可能性豊かな「開かれたもの」 (open-ended) なのだから (Sciabarra, 7)。

註

- 1) Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra ed., *Feminist Interpretations of Ayn Rand* (Pen State U. P. 1999) を参照のこと。これは、ランドのフェミニズム解釈として最初のまとまった試みである。
- 2) リバタリアニズムとは、政府は「国防と外交と犯罪取り締まり」のみ責任を持つ「小さな政府」であるべきで、あとは個人の選択に任せ、個人の責任に帰すべきと考える徹底した個人主義思想である。経済も自由市場主義であり、政府による金融管理や市場介入は認めない。当然、外国には不干涉主義であり国内問題優先である。世界の秩序と人権を守るためには派兵もいとわないグローバリズムには対立する。しかし従来の共和党のように伝統的価値観保持ではない。個人主義の立場から、選択の自由を認め中絶権を支持する。しかし民主党政策の弱者救済や被差別者救済のために必要な財源確保としての重税と福祉担当公務員の増大には反対する。「大きな政府」は必ず国民と公務員の寄生化を促進し、官僚機構の腐敗を招くと考え。自助努力による民間運営が、あくまでも社会の基本と考える。次の文献を参照のこと。David Boaz, *Libertarianism: A Primer* (New York: The Free Press, 1997) 副島隆彦訳『リバータリアニズム入門』洋泉社、一九九八年。古村治彦「リバータリアニズムに関する一考察」(1999年度早稲田大学大学院社会科学部研究科修士論文)。森村進『自由はどこまで可能か——リバータリアニズム入門』講談社、2001年。

この政治思想文脈以外に、アリストテレス哲学研究者アラン・ゴットヘルフ (Alan Gotthelf) が1994年に日本を訪問し、東大、慶応大、神戸大、京大、北海道大で講演し、ランドについても言及した。筆者が調べた限り、日本でのランド研究は、これらに尽きており、まだ実質的に始まっていないと断言できる。

- 3) 竹村和子『フェミニズム』東京：岩波書店、2000年の第一部 (14ページ) 参照。副島隆彦『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』(講談社、1999年)

の第9章「左翼知識人と急進左翼運動の現在」を参照のこと。

- 4) この部分については下記の文献を参照のこと。小室直樹『日本資本主義崩壊の論理』光文社、1992年。同著者『資本主義原論』東洋経済新報社、1997年。佐藤俊樹『近代・組織・資本主義——日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房、1993年。

引用文献

- Binswanger, Harry. ed. *The Ayn Rand Lexicon: Objectivism from A to Z*. New York: New American Library. 1986.
- Branden, Barbara. *The Passion of Ayn Rand: A Biography*. New York: Anchor Books, 1986.
- Branden, Nathaniel. (a) *My Years with Ayn Rand*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers., 1999.
- (b) “Was Ayn Rand a Feminist?” *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. Ed. Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra. University Park: Penn State U. P., 1999. 223-30.
- Chase, Richard Volney. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday, 1957.
- Fukuyama Francis. *The Great Disruption: Human Nature and the Reconstitution of Social Order*. New York: Free Press, 1999. 鈴木主税訳『「大崩壊」の時代』上下巻、東京：早川書房、2000年
- Gladstein, Mimi Reisel. (a) “Ayn Rand and Feminism: An Unlikely Alliance.” *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. pp. 47-55.
- (b) *Atlas Shrugged: Manifesto of the Mind*. New York: Twayne Publishers, 2000.
- Koontz, Dean R. *How to Write Best Selling Fiction*. Cincinnati: Writer's Digest Books, 1981.
- McElroy, Wendy. “Looking Through a Paradigm Darkly.” *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. 157-71.
- Rand, Ayn. *Atlas Shrugged*. New York: Random House, 1957. New York: New American Library. 1992.
- Sciabarra, Chris Matthew. *Ayn Rand: The Russian Radical*. University Park: Pennsylvania State U. P. 1995.

Taylor, Joan Kennedy. "Ayn Rand and the Concept of Feminism: A Reclamation." *Feminist Interpretations of Ayn Rand* 231-49.

副島隆彦『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』講談社, 1999年。

参考文献（上記の引用文献は除く）

Boaz, David. *Libertarianism: A Primer*. New York: The Free Press, 1997. 副島隆彦訳『リバータリアニズム入門』東京：洋泉社, 1998年。

Branden, Nathaniel and Barbara Branden. *Who is Ayn Rand*. New York: Random House, 1962. New York: Paperback Library, 1968.

Gladstein, Mimi Reisel. *The New Ayn Rand Companion, Revised and Expanded Edition*. Westport: Greenwood Press, 1999.

Peikoff, Leonard. *Objectivism: The Philosophy of Ayn Rand*. New York: Dutton, 1991. New York: Meridian, 1993.

Rand, Ayn. *We the Living*. New York: Macmillan, 1936. New York: New American Library. 1996.

———*Night of January 16th*. New York: Longman, Green, 1936. Paper back: New York: World Publishing Co., 1968. New York: New American Library, 1971. New York: Plume, 1987.

———*The Fountainhead*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1943. New York: New American Library. 1993.

———*Anthem*. Los Angeles: Pamphleteers, Inc., 1946. New York: New American Library. 1995.

———*Atlas Shrugged*. New York: Random House, 1957. New York: New American Library. 1992.

———*The Early Ayn Rand: A Selection from Her Unpublished Fiction*. Ed. Leonard Peikoff. New York: New American Library, 1984.

———*For the New Intellectual: The Philosophy of Ayn Rand*. New York: New American Library, 1961.

———*The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library, 1964.

———*Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library, 1967.

———*The New Left: The Anti-Industrial Revolution*. New York: New American

- Library, 1971. 2nd, rev. ed., 1975.
- *Philosophy: Who Needs It*. Bobbs-Merrill, 1982. New York: New American Library, 1984.
- *The Ayn Rand Column*. New Milford: Second Renaissance Book, 1991.
- *Ayn Rand's Marginalia: Her Critical Comments on the Writing of over 20 Authors*. Ed. Robert Mayhew. New Milford: Second Renaissance Book, 1995.
- *Letters of Ayn Rand*. Ed. Michael S. Berliner. New York. Plume, 1997.
- *The Ayn Rand Reader*. Ed. Gary Hull and Leonard Peikoff. New York : Plume, 1999.
- *Journals of Ayn Rand*. Ed. David Harriman. New York: Plume. 1999.
- Sciabarra, Chris Matthew. *Ayn Rand: Her Life and Thought*. Poughkeepsie: An Atlas Society Pub., 1996.
- Walker, Jeff. *The Ayn Rand Cult*. Chicago: Open Court, 1999.
- Yang, Michael B. *Reconsidering Ayn Rand*. Enumclaw: Wine Press Pub., 2000.
- 古村治彦「リバータリアニズムに関する一考察」(1999年度早稲田大学大学院社会科学部科学研究科修士論文)
- 竹村和子『フェミニズム』東京：岩波書店，2000年
- 森村進『自由はどこまで可能か——リバタリアニズム入門』東京：講談社，2001年

**A Russian Immigrant Woman Who Became
a National Writer of USA:
Reading Ayn Rand's *Atlas Shrugged***

Kayoko FUJIMORI

The purpose of this study is to introduce Any Rand (1905-82) and her thoughts by analysing *Atlas Shrugged* (1957), which is the first attempt in the academic field in Japan. Very strangely Ayn Rand has not been almost unknown in Japan so far, though Japanese people has been eager to translate and read bestseller novels in America. This study also aims to explain this strange lateness of Ayn Rand's appearnace in Japan.

Atlas Shrugged has four layers; a mystery story, a science fiction, a female/feminist fantasy and an Arthurian romance. The plot is as follows: From someday and somehow most of the able and virtuous people begin to disappear. Dagny Taggart, the heroic heroine, who is a role model of self-defining, assertive, and competent womanhood, wonders why there are so few competent workers. She wants to know the man who tries to destroy the world by convincing them to quit their works and desert their society. The destroyer is John Galt. Though/ because he is a genuine genius, who invents the miracle motor that solves the secret of converting static energy into kinetic power, he decides to create a new world without collective and bureacratic system, under which parasitic, mean people exploit independent, responsible people. Under Galt's project, the productive and capable people join the strike of the mind. They move into Milligan's Valley (Galt's Gulch) in Colorado, and change the place into their own Atlantis, an ideal community. Some live on the outside to get information and search their comrades to be, doing menial jobs, not allowing the moochers and the leechers to utilize

their brain power. The outside world without good and great people is approaching a catastrophe. Finally the heroine also deserts her big railroad company and old America, and joins Galt's fellows to create a new America.

A 1991 survey by the Library of Congress and the Book-of-the-Month Club lists this novel second only to the Bible as the readers identified as having most influenced their lives. A 1998 Random House/Modern Library readers' poll placed this novel and *The Fountainhead* (1943) at the top of their list of 100 Best Novels of the 20th Century. Judith Wilt says, "this stubborn bestsellerdom of Ayn Rand's novels in America suggests that the immigrant writer had a grip on some key components of the national fantasy life." What is the national fantasy of America? In *Atlas Shrugged*, Rand projects what America will become if things continue on the path of choosing collectivism over individualism and altruism over egotism. Dystopian America reflects USSR, and utopian Galt's Gulch mirrors what USA should be. In this point, this novel is "the Cold War romance" which powerfully advocates and supports the great cause and justice of USA in the Cold War Era. The disruption of USSR in 1990 proved the righteousness of Ayn Rand's thoughts, as well as that of American system from economic realm to personal matters. This can be part of why since the end of the Cold War, the number of academic studies of Rand and her thoughts has remarkably increased.

Nevertheless, very few attempts have been made at Rand in Japan. The reasons can be explained as follows: First, her novel seems right-winged and too conservative for Japanese readers. In Japan, aside from mainstreamed conservative, right-winged politicians, intelligent people's cultural/political milieu has been left-winged and pro-socialist/communist, despite their acceptance of prosperity and freedom under American capitalistic system. Second, Rand's concept of a human being as an individual with free will and reason seems too against the grain of the 20th century's modern and postmodern thoughts. Rand's main philosophy, Objectivism seems too anachronistic and naive, as compared with Nietzsche's words, "There is no fact. There is only interpretation." Japanese people are very easy to accept such postmodern relativism,

since the traditional, philosophical background of Japan is far away from absolutism. Similarly, third, Rand's emphasis of individualism and egotism is completely opposite to the traditional ethos of Japanese people. Good or bad, Japan is still in the pre-modern values and thoughts. Most of Japanese people are likely to confuse individualism with isolationism, egotism with egoism, and cooperation with conformism. Some social scientists indicate, the governmental and economical system in Japan share collective and bureaucratic policies with communist and socialist nations.

Even though Rand's philosophy is against modern and postmodern thoughts, or even if it is opposite to the traditional ethics of Japan, American people after the middle of the 20th century have been greatly influenced by Ayn Rand's novels. This is a fact to face. It was a great fault of Japan that Japanese people had no opportunity to know Ayn Rand and her thoughts. To investigate the national desire and fantasy of America which we can perceive in *Atlas Shrugged*, is what Japanese people should begin and keep above all. Because Japan has been one of tributary countries of American Empire since the defeat of the Second World War and must be also in the future, at least during the first half of 21st century, whether Japan likes or not. Without grasping the national fantasy of its suzerain state, a tributary country cannot know how to cope with its own vulnerability.